

二〇二四年度・学力考查問題【国語】

(中学第三回)

注意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は13ページで□・○・△の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

線あくおのひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 寝不足はけんこうに良くない。
- 2 立ちくらみがしててんてきを打つ。
- 3 救援物資がしきゅうされる。
- 4 大河のげんせんをたずねる。
- 5 品質をほしようする。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学四年生の川上圭介の父と母は離婚しており、現在圭介は母と二人で大阪に暮らしている。圭介はかつて父から北海道に流水を間近で見られる駅があることを教えられ、その記憶を抱え続けている。そんな自身の境遇をラジオ番組の『私の旅』というコーナーに投稿したところ番組内で読み上げられた上に、番組の企画で北海道まで電車で一人旅をすることになった。以下はそれに関する場面である。

——圭介、パパとママ、もうダメなの
母の声が、耳の奥に蘇る。

あれは、両親の離婚が決定的になった夜のことだ。父は項垂れて、背中を向けたまま、圭介の方を見ようともしない。

「ふたりの心の中に氷が張ってしまって、もう前みたいには暮らせな
いの」

とても静かな、しかし、きっぱりとした口調だった。

イヤだ、と声を上げることも、泣きじゃくることも、圭介には出来
なかった。

パパとママと自分と、ずっと一緒がいい。

ずっとずっと三人一緒がいい。

そう訴えたかったけれど、心の中に氷が張った、という母の台詞に、

何も言えなくなってしまったのだった。

子どもの日の正午に大阪駅を出発した「トワイライトエクスプレス」は、翌朝、九時八分の定刻に札幌駅に到着した。

二十一時間、電車で揺られ続けた乗客たちは、乗降口からホームに出ると、やれやれ、と伸びをした。同じコンパートメントで一昼夜をともに過ごした一家は、網走行きの特急乗り場まで、圭介に同行してくれた。

「網走に着いたら、駅員さんに乗り換えを聞くんやで」

「氣いつけてね、圭介君」

一家に見送られて、圭介は特急列車に乗り込む。連休最後の土曜日のせい、車内は家族連れで一杯だ。小学生と両親、という組み合わせが殆どだった。

トワイライトエクスプレスの時とは違って、ここでは圭介に声をかける者も、氣にする者も現れない。圭介は野球帽を目深に被って、心細さに耐えた。

札幌から、旭川、北見と特急はひた走る。予定表通りに駅弁を買って車内で食べたが、食事を味わうとか、車窓の風景を楽しむとか、そんな余裕は圭介にはない。

網走に着いて、電車を降りはしたが、お腹がしくしくと痛みだした。トイレを探して、随分と長く個室にこもる。トイレを出たら出たで、今度は乗り換えホームがわからない。駅員に尋ねたくても、なかなか見つけることが出来なかった。

やっと教えてもらって、ホームを懸命に駆けたが、目指す列車は下

アを閉ざしたところだった。

「待って、待って！ あっ」

焦るあまり、足もとの小さな段差に気づかず、圭介は派手に転倒した。帽子は空を飛び、首にかけていたパスケースは外れ、携帯電話も床を滑って、思いがけず遠く離れる。

「ああ」

転んだままの圭介の眼の前を、列車は無情にも発進してしまった。乗るはずの列車に乗れなかった。この先の旅はどうなってしまうのだろうか。圭介はわっと声を上げて泣き出しそうになる。

♪ダダダー ダダ ダン ダン ダー

ダダダー ダダ ダン ダンダー♪

頭の中で、ラジオ番組のオープニングテーマ曲が鳴り響く。

がんばれ、がんばれ。

圭介は自分に言い聞かせて、手の甲で涙を拭いた。のろのろと立ち上がり、野球帽とパスケース、それに携帯電話を回収する。

「おーい、大丈夫かー」

大きな声に顔を上げると、向かい側のホームから、重そうなりユックを背負った青年がこちらを窺っている。どうやら一部始終を見ていたらしい。

べそをかきつつも、辛うじて頷いて見せた圭介に、偉いぞ、と青年は笑う。

「知床の方だろ？ そこで一時間ほど待てば、次の列車が来るからな」
一番知りたかったことを教えてくれた相手に、圭介はぴよこんと頭を下げた。

ホームのベンチまで戻って、携帯電話を手取る。何かあれば電話を、と母親に言われていた。携帯電話は命綱だ。受話器マークを押さえて、壊れていないことを確かめた。そのまま短縮番号の「1」を押さえれば、母親に繋がる。でも、まだ、自分で何とか出来るから、と圭介は「1」から指を外した。その隣りの「2」という数字に、そつと触れる。

——そこはな、圭介、見渡す限り流水で覆われた海なんだ。線路のすぐ傍まで流水が迫っていて、すごいんだぞ

——何時か連れてってやるからな

父の声が聞こえてきそうだった。

陽射しはあるのに、風がひどく冷たい。圭介はぶるつと身を震わせた。

さむい、ここはさむいや。

こんなにさむいんじゃないかな。

2 ——心の中に氷が張ってしまつて、もう前みたいには暮らせないの胸に棲みついた母の声に、圭介は野球帽のつばをぐつと下げて耐えた。

その小さな駅は、オホーツク海に一番近いことで、全国の鉄道ファンに知られている。

木造の駅舎の一角に、「レストラン駅舎」はある。もと国鉄、のちJRの職員だった多田太郎と浜田治郎が営む店だ。

コックの太郎が作る料理もさることながら、古い客車を模した店内や、眼前に臨むオホーツク海が評判を呼び、流水の季節には、観光バスが横付けするほどの盛況ぶりだった。

「ふあ〜、暇だなあ」

客の姿のない店内で、治郎が大きく伸びをする。ゴールデン・ウィーク最後の土曜日のはずが、昼時を過ぎれば、扉に取り付けたカウベルが鳴ることもない。こんな時、とばかりに太郎はガスコンロの汚れをガシガシと落としていた。

「流水が去ると、客足も遠のくもんだな。な、タロ」

「さぼってる暇があつたら、待合室の掃除でもしたらどうだ、ジロ」
たわしを動かす手を止めず、太郎は素っ気なく応える。

南極犬よろしく互いを「タロ」「ジロ」と呼び合う二人は、見た目も性格もかなり違っていた。背が高く痩身に強面、生真面目の太郎に対して、太短い身体に抜群の愛嬌、大らかな治郎。ちぐはぐではあるが、国鉄時代から同期で、結婚したのも親になったのも同じ頃。今年、そろって五十歳を迎える。

玉子ひとつまともに割れない、調理師免許を取るのに何度も試験に失敗する、そんなところから始めて無事に開業、今日まで店を保ち続けていた。

ピイッという警笛に気づいて、太郎は手を止め、壁の掛け時計へ目を向ける。

「三十六分の下り、定刻の到着だな」

ガタンゴトン、という音が徐々に近づき、ほどなく白いディーゼル車両が、目の前のホームに停車した。

「おやあ？」

見るともなしに表を眺めていた治郎は、窓ガラスに顔を寄せる。
下車したのはただ一人、大きめの野球帽を被り、背中にリュックサツ

クを背負った小学生だった。

「また随分と小さなお客だなあ」³

誰かこの駅で待ち合わせでもしているのか、と治郎は額をガラスにくつつけて周囲を窺ったが、ほかに人の気配はない。

十歳くらいか、小さな男の子は、列車を見送ったあとのホームでオホーツクの海を前に、立ち尽くしている。

気になる、と治郎は思い、急いで店を出てホームに向かった。

日没まであと二時間ほど、陽射しが僅かに朱色を帯びている。斜めからの陽光を受けて、海はきらきらと輝いていた。長閑やかで優しい、五月の海だ。

「うわあ」

男の子は両の手を一杯に広げて、大声でもう一度、うわあ、と叫んだ。少し離れたところで、治郎はその様子をじつと眺めていた。

ここでレストランを開いて、これまで色々なお客を迎えてきたが、あんな小さな一人客は初めてだ。迷子か、あるいは間違つて下車したのか。それとも自らの意思でこの情景を得るためにやってきたのか。いずれかを見極めるべく、治郎は黙って少年を見守った。

男の子は首から下げた携帯電話を手を取った。短縮ダイヤルなのだろう、一度だけ、ぼんとボタンを押す仕草をした。

「パパ！」

無事に繋がったらしく、大きな声で呼びかける。

「パパ、ぼく今、どこにいると思う？ パパが前に話してくれた駅に來てるんだ。ひとりで來たんだよ」

電話の相手は、どうやら少年の父親のようだ。声が弾んでいる。

「氷は全部、解けちゃってる。春になれば、氷はやっぱり解けるんだね。ほら、聞こえる？ 波の音だよ」

少年は携帯を耳から外して、海の方へと差し出した。

そうか、一人旅の報告を父親にしているのか、と治郎は温かな気持ちになる。立ち聞きを中断して、店に戻ろうとした時だ。

それまでと一転、パパ、と呼ぶ子どもの涙声が、治郎の足を止めさせた。

振り向けば、男の子は身を震わせながら、電話の相手に訴えている。

「パパ、ぼく前みた、パパとママと三人で暮らしたい。暮らせるよね？ 心の氷も解けるよね、ね？」

長い沈黙があつた。長い長い沈黙だった。

強い風がどつと吹いて、少年の野球帽を奪った。治郎の方へ飛んできたので、重い身体を弾ませて、ぱつと掴み取る。

やれやれ、セーフ、と帽子を手にも男の子の方を見れば、携帯を握り締めたまま、身を震わせて泣きじゃくっていた。

「坊や」

驚かさないように、治郎は男の子の背後から静かに声をかけた。

★

窓の外、西の空が赤く焼け、店内は徐々に暗さを増していく。

テーブルの上には、携帯電話とパスケース、それに、圭介の母の書いた手紙が置かれているのだが、薄闇に紛れつつあった。

カウンターのランタンの橙色の明かりが、電話で話し込む治郎の横顔を照らしている。

「泣き疲れて眠ってしまいましたし、今夜はうちで。ええ、はい……」

太朗はひざ掛け毛布を広げて、ベンチシートの圭介にそっと掛ける。初めての寝台車、それに不安も大きく、昨夜はあまり眠れなかったのだらう。今はすやすやと寝息を立てていた。

重苦しい通話を終えて、受話器を置くと、治郎は太短い溜息をついた。そして、足音を忍ばせて太朗のもとへと歩み寄る。

「母親は何て？ ジロ」

声を低めて問う太朗に、治郎もまた、

「随分泣いてたよ。こっちまで切なくなる」と、小さく答えた。

何も知らず、丸めたエプロンを枕代わりにして、圭介は無心に眠り続けている。

太朗も治郎も、ともに子どもをもつ父親だった。我が子が幼かった頃のことを、圭介に重ね合わせれば、何とも胸が痛む。

「今夜はこっちに泊まるよ、タロ」

「俺も付き合う」

圭介の寝顔を覗き込んで、ふたりは囁き合った。

上りは午後九時前、下りはその約一時間後、最終列車の去ったあと、駅は深い眠りにつく。子どもの夢路を妨げぬよう、明かりはランタンだけ。それでも、窓の外は星影で仄明るい。ざざー、ざざー、と海の歌う声がBGMになっていた。

グラスに氷、それにウイスキーと水を注いで、人差し指で混ぜる。

はいよ、と治郎は太朗の前にグラスを置いた。

「もとダンナと恋人との間には、じきに子どもが生まれるらしい。もうすでに入籍も済ませたそうだ」

「復縁は有り得ない、か」

可哀そうに、と太朗はほそりと行って、苦そうに水割りを口にした。治郎はロックアイスをひとつ、掌に乗せる。

「ふたりの心の中に氷が張ってしまった——親としては、そう言うよりほかにないだらう。けど、子どもにしてみれば……」

ゆっくりと解けた氷が治郎の掌から溢れて、テーブルを濡らした。

「子どもの心の眼には虫メガネが入っていて、良いことも悪いことも何でも拡大されて映るからなあ」

手酷い傷跡を残さなきゃいいんだが、と言って、治郎は台拭きでテーブルの水気を拭いた。

小さな息子からの懇願の電話に、「ごめん」としか言えなかった若い父親は、今、どんな思いでいるだらうか。

「父親は東京だったな」

太朗は腕を伸ばして、窓際に並べた時刻表を取った。

「今日中は無理だとしても、明日の朝イチで羽田を発ったら、ここに着くのは、と……」

ランタンを引き寄せ、ぱらぱらと時刻表をめくる太朗に、治郎はほそりと呟く。

「来るかなあ」

「来るさ」

つい、声が大きくなり、太朗は圭介の方を見た。安らかな寝息は乱

れていない。

グラスにウイスキーを注ぎ足すと、太郎は慥然ぶぜんと言った。

「子どもは大人の事情を受け容いれて生きていくしかない。大人がそれを償つぐなう方法なんてないんだ。ありつたけの愛情を示す以外には」

「けど、親が皆、そう出来るとは……」

あとは言わずに、治郎もまた、とくとくとくと、とウイスキーをグラスに注ぐ。

「一緒に暮らせないのは仕方がない。でも、会いたいだろうな、この子は今、この場所で父親に」

会わせてやりたいよ、と治郎はしんみりと言そい添そえた。

翌朝は、青色の絵の具を丁寧ていねいに塗ぬり込んだかと思うほどの、上天気じょうてんきになった。

母親の真弓と連絡を取り合って、圭介が乗る列車を決め、送り出す用意も整えた。網走行きの上りの到着まで、まだ大分だいぶんある。

ホーム端のミラー支柱にもたれて、圭介はオホーツクの海を眺めていた。太郎と治郎は、内心、やきもきしつつ、時の来るのを待った。やがて、ピーツと警笛を鳴らして、網走方面からの下りが姿を現した。

「あの下りに乗ってなきや、どうするよ、タロ」

治郎が傍たわらの太郎を見上げて言った。

昨夜、「来る」と断言したものの、徐々に自信を失い、太郎は「ううーん」と呻うめき声こゑを洩もらす。

列車は速度を落として、ホームに差し掛かった。ほんやりと車両を

見ていた圭介が、はっと身みを乗りだす。

列車の窓を、乗客がドンドンと叩たたいている。

「パパッ」

圭介が鋭すまく叫こゝろび、列車を追いかける。

太郎と治郎の前を過ぎて、ゆつくりとディーゼル車は止まった。

中から三十代おほと思おもひき男おとこが飛び出してきた。ほさほさの髪、ハーフコートはのボタンはひとつずつずれて嵌はめられている。

父親に駆け寄った圭介は、しかし、その手前で立ち止まった。親子はじつと見つめ合ったまま、暫しばく、口くちを利きかない。

圭介、と父は掠かすれた声こゑで息子の名前を呼ぶ。その目が赤く染まっていた。

「圭介、ごめん……」

今に至っても、それ以外に言葉が見つからないのだろう。父は苦しげに声こゑを絞しぼりだした。

見開いたままの圭介の両の瞳ひとまに涙なみだが溜たまり、ぎりぎり下瞼したまで留とどまっている。

父親は崩くずれるように両の膝ひざを地面についた。そして、小さな息子の身体をそつと抱だき寄せる。

7 「ごめんよ……」

父に抱かれたまま、圭介は声もなく涙なみだを零こぼした。

蒼天そうてんのもと、オホーツクの海はこの上なく優しく歌いながら、親子へと白い波を寄せていた。

(高田郁たかだかほ『駅の名は夜明 軌道春秋Ⅱ』所収「子供の世界 大人の事情」)

双葉社より)

問一 —— 線 a 「無情にも」・b 「長閑やかで」とありますが、本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 無情にも

ア 無関心をよそおって

イ 思いやることもなく

ウ 気にかけてつつも

エ 気持ちを伝えられず

b 長閑やかで

ア 希望に満ちていて感動的な様子で

イ 穏やかで限りなく広がっている様子で

ウ ひっそりとして周囲に何もない様子で

エ ゆったりとして落ち着いている様子で

問二 —— 線1 「圭介は〜耐えた」とありますが、この時の「圭介」の「心細さ」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 車内は家族連ればかりであり、自分のことを気にかけてくれる人もいないせいで、一人孤独を感じている。

イ 寝台特急とは違って車内がにぎやかで一人でくつろぐこともできないため、周囲に不満を持っている。

ウ 一人きりの自分を物珍しそうに見てくる周囲の様子に、涙がこぼれそうになるほどの深い悲しみを覚えている。

エ 周囲の環境の変化を目の当たりにしたことで、一人で遠い場所まで来たことを実感し、落ち着きを失っている。

問三 —— 線2 「胸に棲みついた〜耐えた」とありますが、この

時の「圭介」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 普段の母の様子からは想像もできないような冷淡な様子を思い出して身震いしている。

イ 三人で一緒にいられないことを突きつけられた時の悲しみを抑えつけようとしている。

ウ 陽差しが出ているのに氷も溶けないようなあまりの寒さに言葉を失っている。

エ 両親の関係が修復することはないという事実から目を背けようとしている。

問四 —— 線3 「また随分〜お客だなあ」とありますが、ここから★までの場面における「治郎」の心情の変化について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 好奇↓安堵↓動揺

イ 関心↓不審↓安堵

ウ 興味↓安堵↓心配

エ 疑念↓安心↓不審

問五 —— 線4 「治郎は〜ついた」とありますが、この時の「治郎」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 圭介の母親との電話の中で、圭介の父親に復縁する意思がないことを告げられてしまい、この事実を圭介に伝えるかどうか迷っている。

イ 受話器の向こうで泣いている圭介の母や、両親が離別してしまうという事実をまだ受け止めかねている幼い圭介の境遇に同情している。

ウ 幼い圭介を北海道まで送り出したのみならず、その地で圭介がトラブルに巻き込まれていることを知った母親の胸中を思い、心配している。

エ 圭介の母親に同情はするものの、離別によって圭介を傷つけていることに違いはないため、圭介の両親に怒りを覚えている。

問六 —— 線5 「子どもの〜映るからなあ」とありますが、「圭介」にとつての「良いこと」と「悪いこと」とはどのようなことだと考えられますか。それぞれわかりやすく説明しなさい。

問七 —— 線6 「来るさ」〜大きくなり」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父親との思い出の場所である北海道で離別を告げられた圭介の心の内を思うと、息子と一緒に暮らさなさいという選択をした父親を許すことができなかつたから。

イ 父親が直接圭介に謝ることがせめてもの償いだと思うが、圭介の両親が離別することは避けられないという事実を圭介にも分かつてほしかつたから。

ウ 圭介の父親が圭介のことを心配しておらず、明日までに東京から北海道まで来るのは現実的ではないと言いつける治郎の態度に思わず腹を立てたから。

エ たとえ圭介の両親が復縁することはないとしても、父親なら迎えに来るに違いないという自身の考えを否定されたかのように感じ、感情がたかぶつたから。

問八 —— 線7 「父に〜涙を零した」とありますが、ここから読み取れる「圭介」の心情について「声もなく」という表現に注目してわかりやすく説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

想像と知覚は明瞭に異なる心の働きであり、それゆえ混同されることはまずない。架空と現実の混同がほとんど起きないのも、想像と知覚の混同がまず起きないからである。

しかし、明瞭なはずのこの区別も、ヴァーチャルリアリティ（VR）¹によって掘り崩されつつある。VR用のゴーグルを着けて、VRの世界に没入すると、そこから受ける光や音の刺激は、現実世界から受ける刺激とほとんど変わらない。波音の聞こえる明るい海の光景は、VRでも、知覚でも、同じように明瞭に生き生きと立ち現れる。ゴーグルを着けていることを忘れると、現実の世界を知覚していると勘違いしてしまいがちだ。もちろん、VRの世界は架空であり、それゆえVRでの経験は知覚ではない。かといって、想像とも言いきれない。VRは、架空の事柄を経験する、想像とは別のやり方なのである。

「ヴァーチャル（virtual）」という英語は、たんに「架空の」や「仮の」を意味するというよりも、「架空だが、実質的には現実と同様の」を意味する。ヴァーチャルなリアリティは、架空ではあるが、あたかも現実を知覚するように経験されるリアリティである。したがって、それは現実と混同されやすい。

さらに、ヴァーチャルなリアリティが現実そのものになってしまう場合もある。そもそも現実だとすれば、混同ではないので、それを架空のことだと「正す」試みは無用である。

いまの段階では、VRのなかで株の取引をして大損しても、それは

架空の出来事だとされ、現実の世界で大損したことにはならない。しかし、VRでの株取引を現実と連動させることも可能である。VRの世界で大損して預金残高が減れば、それと連動して現実の世界での預金残高も減るようにするのだ。そうすれば、VRでの株取引は現実の世界での出来事となる。

昨今は、オンラインでの会議が増えたが、このオンラインの会議は架空ではなく、現実の会議である。しかし、オンライン会議を架空の会議として行うことも可能だ。現実の会議は深刻なので嫌いだ、架空の会議は言いたい放題なので好きだという人は、架空のオンライン会議を開くかもしれない。オンライン会議が架空か現実かは、その扱い次第である。それと同様に、VRでの株取引も、その扱い次第で、架空の出来事にもなれるのである。

しかし、ヴァーチャルなリアリティが現実と混同されやすいとすると、VRをどう扱うかは完全に私たちの自由になるわけではないだろう。私たちは現実の世界を生々しく知覚するのと同じように、VRの世界を生々しく経験する。だから、VRの世界は私たちにたいして、その世界を現実の世界として扱うように迫ってくる。こうして私たちはVRを現実として扱うことが増えていくであろう。

このようなVRの技術は、現在、ものすごい勢いで発展している。フェイスブックが二〇二一年に社名を「メタ」³に変えて、「メタバース」の開発に本格的に乗りだした。メタバースは非常に大規模なVRの世界である。私たちは現実の世界でさまざまな経験や活動をするように、メタバースでさまざまな経験や活動をすることが可能になる。

I

現実の世界で街を散歩するように、メタバースのなかで自分のアバター※1を使って街を散歩することができる。

ただし、メタバースはたんに架空の世界を楽しむだけの場ではなく、むしろそこで現実の経験や活動をするような場となっていくであろう。

Ⅱ、私たちはメタバースでの経験や活動を現実の経験や活動として扱うようになるのである。私たちは現実の都会や田舎いなかで暮らすのではなく、メタバースのなかでもにも暮らす。たしかに、眠るときは相変わらず現実の家の現実のベッドの上だが、目が覚めるとすぐメタバースの世界に没入し、そこで仕事をしたり、買い物をしたりする。これらは架空の経験や活動ではなく、現実の経験や活動である（つまり現実のものとして扱われる）。メタバースで買い物をすると、現実の世界での自分のお金が減るような仕組みになっているのだ。

メタバースが普及してくると、日本からペルーのマチュピチュ遺跡いせきに行ってみたくと思ったとき、何時間もかけて飛行機を乗り継ぎ、延々と長旅をする必要はない。メタバースでその遺跡を堪能たんのうすることができると、Ⅲ、遺跡の映像を見ているだけで、本物の遺跡を見ていると言われるかもしれない。だが、精巧せいこうにできた映像はじつさいの遺跡とまったく見分けがつかず、本物を見るときと同じように、メタバースのなかで遺跡を十分楽しむことができる。そうであれば、メタバースでの遺跡の経験は現実の遺跡の経験だと言ってよいのではないだろうか。その経験を現実の遺跡の経験として扱うことは、十分可能である。

Ⅳ、マチュピチュ遺跡のように現実には存在しないものなら、そのように扱うことが可能だとしても、現実には存在しないものについてはどうだろうか。現実には存在しない事物や出来事をメタバースで経験する場合は、やはり架空の事柄の経験として扱うのではないだろうか。メタバースで巨大な竜りゅうが天空を舞う雄大な光景を見る。しかし、竜は現実には存在しないから、空を舞うことも現実にはない。そうだとすれば、私たちはメタバースでの竜の舞いの経験をたんに架空の事柄の経験にすぎないと見なす（つまりそのように扱う）のではないだろうか。

たしかに最初のうちは架空の事柄の経験だと見なすだろう。しかし、現実には存在する多くの事柄をメタバースで現実のものとして経験するようになってくると、現実には存在しない竜の天空の舞いですら、私たちはメタバースでそれを現実の事柄として経験する（つまりそのように扱う）ようになるであろう。メタバースでの竜の舞いの経験は、竜が存在して、それがじつさいに天空を舞うのを見たとしたら、私たちが得るだろう経験と寸分たが違わない。このように経験の感覚的な質（視覚、聴覚、触覚などの五感において感じられる質）が同じであれば、私たちは竜の舞いの経験を現実の事柄の経験として扱うようになるだろう。経験の感覚的な質が同じであれば、私たちはそれを現実の事柄の経験として扱うように迫られるのである。

しかし、そうは言っても、これはなかなか納得なごしがたい話かもしれない。竜は現実には存在しないから、やはり竜の舞いは架空でしかありえない。それゆえ、竜の舞いの経験を現実の事柄の経験として扱うことは、明らかに間違っている。この思いは根強いものだろう。

本節の最初のほうで述べたように、⁴ 私たちはいまのところ、架空と現実を明瞭に区別し、その区別において現実だとされるものだけを現実として認めようとする傾向が強い。それゆえ、メタバースでの竜の

舞いも、なかなか現実として認めることができないうだろう。しかし、メタバースでの経験を現実の事柄の経験として扱うことが多くなると、竜の舞いの経験も現実の事柄の経験として次第に扱うようになってくるだろう。たしかに竜の舞いを現実の事柄として扱えば、そのような竜が襲^{おそ}ってきたらという心配も生じるだろう。しかし、現実の世界でクマが襲^{おそ}ってきたり、クマよけスプレーをもっていれば大丈夫なように、メタバースの世界でも何らかの対策を考えておけば、問題ないのである。

メタバースは現実の世界と同じような生々しい経験や活動（同じような感覚的な質をもつ経験や活動）を提供することで、架空と現実の区別をぼやけさせ、両者を融合^{めいごう}させる。とはいえ、私たちの生身の脳・身体は現実の世界にしか存在しえない。生身の脳・身体がそこで神経活動をし、呼吸し、栄養摂取^{せうじゆ}をしなければ、私たちは生きていけない。生身の脳・身体が現実の世界にしか存在しえない以上、メタバースによつて架空と現実の区別がどれほどぼやけても、その区別が完全になくなることはありえないのではないだろうか。

この可能性の有無を考察するために、⁵ひとつの思考実験として、つぎのような状況を考えてみよう。私の生身の脳・身体のある方を完全にデジタル情報に変換^{へんかん}して、そのデジタル情報をコンピュータに送りこむ。そうすれば、私はコンピュータのなかで「デジタル自己」として存在するようになる。タンパク質でできた生身の脳・身体はもはや存在しないが、それに代わって、デジタル情報の集まりとしての脳・身体がある。そして私の心は生身の脳・身体ではなく、デジタルの脳・身体によつて実現されることになる。

このように心を生身の脳・身体からコンピュータのなかのデジタル脳・身体へ移すことを「マインドアップローディング」とよぶ。この技術もじつさいに研究されているが、実現するのは遠い将来のことであろう。

もし私がマインドアップローディングを行うと、私はコンピュータのなかの存在となる。もちろん、コンピュータも現実の世界に存在する物理的なものであるから、そのなかにいる私のデジタル脳・身体も現実の世界に存在する物理的なもの（コンピュータの電気活動によつて成立するもの）である。しかし、デジタル脳・身体は、生身の脳・身体と違って、コンピュータの外の現実の世界で神経活動や呼吸、栄養摂取などを行う存在ではない。

デジタル脳・身体はメタバースと同じく、コンピュータの電気活動によつて成立する物理的存在である。したがって、デジタル脳・身体とメタバースにたいして、現実と架空の区別を設ける必要はないだろう。生身の脳・身体なら、そのような区別を設けることに意味があるだろうが、デジタル脳・身体の場合はその区別が意味を失う。マインドアップローディングによつて生身の脳・身体からデジタル脳・身体になると、架空と現実の区別がなくなり、両者の融合が生じるのである。

（信原幸弘『覚える』と「わかる』筑摩書房より）

※1 アバター…自分の代わりにインターネットやゲームなどの仮想空間で活動するキャラクターのこと。

問一 I Ⅳ に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってはけません。)

- ア つまり イ たとえば ウ では
- エ なぜなら オ もちろん

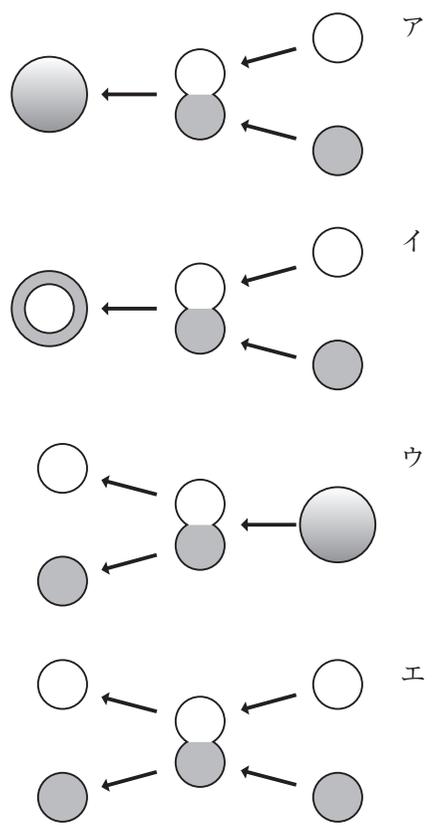
問二 線1 「ヴァーチャル」掘り崩されつつある」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 現実と架空との間に明確にあった境目が消えさること、想像上の事柄を実体験できる可能性が広がりがつつある。
- イ 現実に見えている世界がすべてだと思う私たちから見、むしろ架空の中にこそ真実を見つけられるようになる。
- ウ 架空と現実がひと括りになってしまうことで、現実世界を生きたいと願う人たちの混乱を招く事態になり始めている。
- エ 架空と現実を区別する感覚があいまいになっていき、架空の事柄が現実であるかのように扱われることが増えてきている。

問三 線2 「架空の出来事にも」なるのである」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 現実の事柄を架空として扱うこと。
- イ 架空を架空のままにも現実にもできること。
- ウ 現実の事柄と架空の事柄とを明瞭に分けないこと。
- エ 架空の取引や架空の会議を行わないこと。

問四 線3 「メタバースは」VRの世界である」とありますが、次の図はこれ以降の「メタバース」における「現実」と「架空」の関係を示したものです。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。



問五 ——線4「私たちは」傾向が強い」とありますが、その理由を説明した次の文の「X」に当てはまる表現を文中からさがし、八字で抜き出しなさい。

私たちは竜の舞いを「X」が違うものとして扱うから。

問六 ——線5「ひとつの思考実験」を考えてみよう」について、

後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) この「思考実験」をおこなう目的を五十字以内で説明しなさい。

(2) この「思考実験」を通して得られた結果を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 架空と現実の区別を設けず両者の融合をはかるためには、生身の脳・身体を常にマインドアップローディングしておく必要がある。

イ デジタル脳・身体はコンピュータ内の物理的な存在として、メタバースと同様に架空と現実の区別に意味を持たせることができなくなる。

ウ 架空と現実の区別を設けるために存在した生身の脳・身体は、マインドアップローディングされることで、その区別の意味を失い両者を融合させる。

エ デジタル脳・身体も物理的なものとして成立すると考えられるため、メタバースと同様に架空と現実が一つのものになり区別をつける必要がなくなる。

問七 本文の内容と表現の特徴について説明したものとして、正しいものには「1」を、正しくないものには「2」を、それぞれ解答欄に書きなさい。(ただし、すべて同じ数字の場合は、採点の対象外とします。)

A V Rやメタバースといった、今後人間の生き方を左右する可能性のある技術を話題に、使用例や使用上の注意を紹介することで、これまで漠然としていた新技術へのイメージが明瞭になるように論を展開している。

B 知覚とは何かという身近であるがゆえにその全容をつかみとりにくい問題について、V Rやメタバースを例に仮説を立てて検証を進めながら、一筋縄には結論づけられないことをていねいに述べている。

C 先端科学と人に役立つ技術の融合が、これからの産業の中心核を担っていくだろうという仮説のもと、デジタル情報変換といった架空の思考実験を通じて、変わりゆく世界の未来図を印象的に描いている。

D 架空と現実の区別を論じてはいるが、マインドアップローディングの技術を出すことで、最終的には現実を現実そのものとして意識できるようになり、架空と現実を対照的に見られるように論を展開している。

E 架空と現実の区別が完全になくなる可能性があることを、株取引やオンライン会議のような身近な具体例や、マインドアップローディングのような思考実験を通じて段階的に論を展開している。

受験番号

氏名

得点

一

あ

けんこう

い

てんてき

う

しきゅう

え

げんせん

お

ほしょう

二

問一 a

b

問二

問三

問四

問五

問六

悪いこと 良いいこと

問七

問八

三

問一 I

II

III

IV

問二

問三

問四

問五

問六 (1)

Grid for question 6 (1)

(2)

問七 A

B

C

D

E

Score box